

子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2014年5月 NO.179



[もくじ]

- 2～3 現代地方譚アーティスト・イン・レジデンス須崎という花…佐々木かおり
- 4～5 第9回美術作品コンクールの審査にあたって 平面(タブロー)の表現について…窪田研二
- 6～7 第24回高知出版学術賞を審査して…中内光昭
- 8～9 グッゲンハイム具体展の招待日…高崎元尚
- 10～11 エネルギー選択への道～小水力発電の可能性…藤島和典
- 12～13 言葉の現場から45 「波の下の都」のなぞ…広井護
- 14～15 風俗歳時記・風伯

表紙デザイン：「△」門脇千夏

公益財団法人高知市文化振興事業団

げんだいち ほうたん 現代地方譚アーティスト・イン・レジデンス須崎という花

佐々木 かおり

「ここでレジデンスが行われることは小さな奇跡だと思っていて、この奇跡のつぼみを咲かせることができるようにがんばりたい」
レジデンス参加作家の竹川宣彰さんが記者会見で言ったことばです。須崎市のまちかどギャラリーで、二〇一四年一月中旬から二月下旬にかけて開催した「現代地方譚アーティスト・イン・レジデンス須崎」は、その一部始終がまるで一つの花が開いていくような企画展でした。

まちかどギャラリーに配属されて

須崎市の緊急雇用でまちかどギャラリーのスタッフとして働くことになったのは、二〇一三年四月。それまでは医療関係の仕事をしていたの、美術の知識や興味は特にありませんでしたし、一年でハテ？なにができるかと思つてのスタートでした。「そもそもギャラリーち、何？」「運営って何するが？」自問自答する毎日でした。

それでもなんとか、展覧会をし、ライブや、寄席、ワークショップな

ども開催していききました。そんな日々の中で、大きな出来事が二つありました。一つ目は、ドイツへ美術留学をしていた川鍋達さんが地域おこし協力隊として、まちかどギャラリーへ配属されてきたこと。二つ目は、ふらりと来たお客さん、須崎市出身の現代美術作家竹崎和征さんとの出会いでした。

二人とも作家として活躍されており、また共通して「まちかどギャラリーでレジデンスができたからおもしろいの」と言っていたのです。「この二人は会った方がいい！」そう思い、川鍋さんを通して、竹崎さんのアトリエに行きました。そのころの私は「レジデンスとはなんぞや」といった具合でしたが、そこから時々三人で会い、美術のこと、高知のこと、日本のことを話しました。今思ふと、この出会いが「現代地方譚」の種となったのだと思います。

現代地方譚始まる

二〇一三年十月、観光庁の委託事業である「滞在交流型観光に係る受

入環境改善事業（来訪者の滞在時間を延長するための実験事業）」の地域に須崎市が選ばれ、その事業の拠点としてまちかどギャラリーを使うことになりました。なんとなく心のなかに温めていたアーティスト・イン・レジデンス。それを実験事業の一つとして行えることになりました。キュレーターとして竹崎さんが入り、川鍋さんは作家として参加することが決定。県外から竹川宣彰さん、小西紀行さん、COBRAさん、県内から竹花綾さん、横田章さんが参加作家となりました。六名の現代美術作家がまちかどギャラリーに集結し、須崎市に滞在。その間、須崎市の伝統や文化、歴史を知り、作品を作ってもらいます。作品を通して、須崎を語ってもらおうという意味があり、「現代地方譚アーティスト・イン・レジデンス須崎」というかっこいい名前になりました。二〇一四年一月十一日から二週間を作品の制作期間とし、一月二十五日から二週間を作品の展示期間としました。

事務局として大切にしたのは、作家さんが来てよかったと思ってもらえる環境作りです。具体的に言うとう作家さんに費用面で自己負担が出ないようにすること、作家さんと地域の人がいい関係づくりが出来るよう、橋渡しをすることでした。作家の皆さんにはもちろん、謝礼金がありました。それが、果たして十分だったかというところで思っていないです（交通費、滞在費、食費、材料費などすべてが含まれています）。その部分で作家さんが無理にならないよう、夜は一揃に鍋を囲んだり、釣ってきた魚を皆で料理をしたり、自分たちの工夫で節約をしました。今、思うとそれが良いコミュニケーションでした。作家さんが「来てよかった」と思える環境は、きつと地域の人も「作家さんが来てくれてよかった」と思える環境でもあり、将来的に「須崎はいいところだった」と宣伝してくれることが約束されていると思えました。

地域の反応とアートを超えて 広がる交流

制作期間中は地域の人達も「なのしゆうぜ？」という感覚で、遊びに来てくれる毎日でした。作家さんも持ち前の人柄で町の人に溶け込み、差し入れをもらったり、お店に招かれたり、今までにない交流が生まれていました。ギャラリーの外でたむろしているだけで「にぎわ



いがあつて嬉しい」と近所の方に喜ばれました。作品のモチーフになったお客様まで出現し、橋渡しなんて必要なくらい、作家さんをはじめ、様々な立場の人がつなげていきましました。昔、この建物に多くの人が出入りして、賑わっていた時もこんな感じやったんやろうか。その場にいることで幸福な気持ちに満たされていきました。それは作家の皆さんもそうだったのか、須崎だからこそ生まれた作品が次々と並んでいききました。制作が終了し、作家の皆さんがいなくなつてからの展覧会が始まりました。「芸術はようわからん」素晴らしいながら、現代アートと多くの須崎の人が触れ合っていました。正直いうと、現代アートを受け入れても

に近寄つてきたのです。彼らの不安を和らげた、不安でも足を止める気持ちにさせたもの。それは単純に「まちかどギャラリー」にいれば、あの人がおるき」とか「あのお喋りした人の作品が見てみたい」と思わせる人間の力だったの飛び火して、広がっていききました。期間中の週末限定カフェを担当してくれた古谷さんは、現代地方譚に来ていたお客様と親しくなり、そのお客様のお店（安芸市）に商品を納入するようになりました。地元醤油屋のおかみさんは自分の店に来たお客さんを、次々にギャラリーに引つ張つてきます。その人の好き嫌いなんてお構いなしに！ 広島のお客様は、須崎が好きになりTwitterで須崎の情報を流しました。そして、それを見たフォロワーさんが香川から来館してくれました。その方はいつか須崎で自分の音楽をしてみたいと言っています。自分の目の行き届かない所でも、人が人を呼び、何かの反応が起こっていました。それは



アートというフィールドを超えた連鎖反応でした。多くの要望から会期は二週間伸び、そして、それも終了した時、来館者数は千五百人を超えていました。

次の物語へ

この少し特殊なレジデンスはスタッフ・作家・地域住民・お客様がアートという枠にとらわれず、それぞれハッピーな関係を作ることができました。今、まちかどギャラリーは現代地方譚第二回を目指して動き始めています。継続して行くことで地域の活力を創出し、作家自身が新たな可能性を見出すきっかけになっていくと信じています。

今回、奇跡のつぼみが、須崎で小さな花を開かせました。それが、また新しい種となり、この素敵な花が各地に広がっていくことを心から願っています。

※文中の「レジデンス」は全てアーティスト・イン・レジデンスを指します。

※アーティスト・イン・レジデンス（AIR）：各種の芸術制作を行う人物を一定期間ある土地に招聘し、その土地に滞在しながらの作品制作を行わせる事業

まちかどギャラリー

2010年2月、旧三浦邸と呼ばれる商家建築が、「まちかどギャラリー」として開館。表現活動発表の場・観光案内所・休憩所として、住民や観光客が利用する地域の拠点として親しまれている。来館者数は年々増えており、2014年度は約6,000人の来館があった。
・営業時間 9時～17時
・休館日 月曜日
・電話 050-8803-8668
・HP <http://machikado-gallery.jimdo.com/>



ささのき かおり

一九七九年 須崎市生まれ
まちかどギャラリースタッフ、高知県芸術祭執行委員。「ホゲットさん」という名前で須崎を中心に情報発信活動中。blog「ホゲットさんのSUSAK I どつとじえーびー」

●第9回美術作品コンクールの審査にあたって

平面(タブロー)の表現について

窪田 研二

現代美術の展覧会を企画するキュレーターとして表現の現場に携わっていると、特定の展覧会を開催する「意味」がどこにあるのかという問いに必ず直面する。

私たちはテクノロジが急速に発展した高度情報社会の真っ直中に生きており、インターネットを通じて世界中の情報を瞬時に検索することが出来ると同時に、さまざまな表現が縦横無尽に広がっている。そのような状況の中で、わざわざ足を運ばなくては見るものの出来ない展覧会というメディア／フォーマットは果たしてどこまで有効であり得るのか？そんな問いを自らに発しつつ、この時代において意義のある展覧会を企画することは私たちの使命でもある。さて、なぜわざわざこのようなことを書き始めたのかと言えば、

この問題はキュレーターだけでなく、この時代に作品を創るアーティストにも同様に当てはまるからだ。特に平面(タブロー)というメディアを選択し、絵画作品を描いているアーティストは、なぜインターネット上で発表できるような電子メディアを選ばずに、わざわざキャンバスや板の上に絵の具を塗ってイメージを創出しているのか？そうした問いを自らに投げかけた上で、あえてタブローを選択している理由はどこにあるのだろうか？など、さまざまな問いに直面するはずである。

私自身もそのような疑問を持つたまま、今回「第9回美術作品コンクール」の審査会場に足を踏み入れた。しかし残念ながら、作品を見た限りそうした問いに対して真摯に向き合っている作家は多く

なかったように思う。つまり、多くの作家は無自覚に「絵を描く」という行為を選択している印象を受けた。

あえて図式的に言えば、作品の



質を決定するのは、表現の形式と表現された内容だといえる。表現形式とは、まずどのような表現方法を作家が選択するのかということであり、今回のコンクールでは平面(タブロー)ということになる。さらにそこから油絵、日本画、版画、イラストなど、さまざまな方法が選択されることになる。そして今度はそれらがどのような技法によって描かれるかが作家によって選択されることになる。このように作品を制作する以前の時点で、すでに作家はいくつもの選択をおこなわなければならない。その表現形式のメリット、デメリットを分析し、歴史的な背景も考えながら、その形式を選択することの可能性を考えること。こうした可能性を十分検証し、意識的におこなっているか否かによって、作品のクオリティが左右されていくのである。それこそが作家がまず最初におこなわなければならない作業なのである。なぜなら、ここで自らの立脚点を誤って選択してしまった時点で、その後どんなに努力をしたとしても良い表現にはたどり着かないからだ。次に表現内容について重要なこ

とは、作家が世界を自分なりに分析、あるいは認識し、その上で想像力とともに表現へと昇華させる作業である。そこには作家の世界観が色濃く反映されることになるが、同時にその世界観を的確に表現するためにあらゆる知識と技術を動員することになる。そのレベルが高度であればあるほど、表現の幅は拡がり、複雑な表現が可能になる。

ダンスを例に挙げると分かりやすい。リズムの良い音楽に合わせて踊ることは、コンサートやクラブなどでは誰もがこなっている行為だろう。自ら踊ることで体も心も解放されていくような気分になるのは、素晴らしいし見ているのも楽しい。しかし彼らは決してプロのダンサーではない。ダンスの種類(形式)にかかわらず、プロのダンサーは的確な身のこなしや計算された構成によって、人に見せることを意識したダンスへと完成していくのである。つまり、どれほど作家に表現すべき世界観があったとしても、それを的確に他者に伝えるには周到な準備と技術が求められるのだ。

その中で今回最優秀賞に選んだ佐竹龍蔵氏の「少女」は、少女の

顔がモザイク状に描かれたその表現形式と、現代に生きる若者たちの空虚感や分裂感といった特徴を想起させる表現内容が絶妙に一致しており、他の出品作家との実力の違いを感じた。今後の課題としては、この表現形式をどのように発展させ、内容を深化させていくかだろう。優秀賞に選んだ竹内麻の「輪舞曲」には作家独特の世界観とそれを版画という手法で上手く表現している点に魅力を感じた。そして同じく優秀賞に選んだ玉井祥子の「枯木風媒図軸」は、土佐典具帖紙と墨という伝統的な素材を用いながらも、古さを感じさせない清新な表現に惹かれたのが授賞理由である。

また今回は受賞に至らなかった出品作家の中で数人は、独特の世界観を持った作家や、高い技術のレベルをクリアしているこうした作家については、今後さらに掘り下げることに期待したい。作品が生まれることを期待したい。芸術家という人生を選択することとは、決して容易なことではない。作家は常に前に描いたものよりも良い作品を描くことが出来なければ、そこでキャリアが終わってし

まう可能性がある。さらにこれまでに美術史に連なる幾多の先達の芸術家が残した仕事を更新しなければ、歴史に残ることは無いシビアナ世界だ。その現実を受け止めた上で、どうしても作家としての道を歩む決意をするのであれば、本気で研究や探求に取り組んで欲しいと思う。どれだけその実践がおこなわれたか否かによって、明らかにそれらは作品に反映されるのだ。ダンサーが踊り続けるための体を作り上げるように、作家も描き続けることが出来るための基礎的な知識や鍛錬が重要なのだ。平面(タブロー)の唯一性が持つ豊かな世界を獲得することは、平面の表現の可能性を証明することでもある。今回このコンクールで出会った皆さんの成功を祈っている。

第9回美術作品コンクール 受賞作品



最優秀賞 「少女」 佐竹龍蔵



優秀賞 「枯木風媒図軸」 玉井祥子



優秀賞 「輪舞曲」 竹内麻

くぼた けんじ

一九六五年 東京生まれ
キュレーター／筑波大学芸術系准教授。上野の森美術館、水戸芸術館現代美術センター学芸員を経て二〇〇六年よりフリーランス・キュレーターとして活動。国内外の

展覧会を多数企画するともに、若手作家育成にも力を入れている。KENJI KUBOTA ART OFFICE代表(社)アート・アンド・パブリック協会理事。

高知出版学術賞を審査して

中内 光昭

高知出版学術賞は、四半世紀前、「学術」をその特徴に掲げて創設された。発足当時は評価の重点は学術レベルに置かれ、その評価に依る出版物も少なくなかったが、最近になり、学術レベルは別として、専門家だけが理解できる出版物や学術論文をそのまま印刷物にしたような応募作品も見られるようになってきた。そのような変化を踏まえ、審査委員の間で、審査のあり方について改めて論議されるようになり、次のような合意が得られた。本賞の目的の一つは、本県の文化の向上にあり、難解な専門書より、学術を市民が分かるように解説した本、つまり、学術的香りの高い教養書がこの趣旨に適っている、との合意である。本年は十七点の応募があり、八名の審査委員により、次の三点が選出された。なお、受賞作に順位はつけられていない。



左から、知野文哉、吉川義一、松岡周平の各氏

で多くの夾雑物が付着してきたと考え、史実に基づく龍馬像を求めて厳密な実証研究を行い、説得力のある結論を導き出している。次の三部に分けて論じている。「船中八策」は本場に龍馬が書いたものか

「汗血千里の駒」の著者、坂崎紫瀾はどういう人物か

幻の未公刊史料「坂本龍馬伝抄稿」の発掘紹介

「船中八策」については、「白筆本も写本も存在せず、明治以降の龍馬の伝記の中で、次第に形成された」ことを実証し、坂崎紫瀾については、経歴、業績、「汗血千里の駒」を書いた目的、などを紹介している。「坂本龍馬伝抄稿」の発掘も貴重な成果である。学術的にレベルの高い研究で、

実証主義に徹して史料を博捜し、説得力のある論議を展開している。著者はこのようにして「裸になった」龍馬を、人間的魅力に長けた人物で、西郷南州とは一味違う、よりグローバルな、将来を見据えた、いわば、四次元的な大きさを持つ人物と評価している。

膨大な史料を提示しながらも、読み手を飽きさせない筆力は見事な、索引があれば、さらに読み易かったと思われる。

吉川義一著
『土佐ことば』土佐ことば辞典
(二点セット)
(南の風社刊)

著者は滋賀県の出身。一九五二年に高知大学に赴任した土壌学者で(元農学部長)、任地の土佐ことばに驚きと親しみを感じ、「県

外者」の感性で、土佐ことばの収集を始めた。特に、退官後の十五年はこの仕事に専念し、土佐生まれの夫人の協力で、言葉の用例、語源などを調べ、今回の二冊を刊行した。

土佐のことばには、「太い、細い」や、左右の代わりに使われる「東西南北」など、字面は「共通語」と同じでも、独特の意味や使用法を持つ言葉がある。このような言葉を「発見」できるのは、言わば「よそ者」の特権である。「土佐ことば」は全国的にも注目され、研究書や辞典も刊行されている。今回の業績はこれらに上積みをするのではなく、県外者の感性で土佐ことばを解説したものである。「土佐ことば辞典」では、語源、用法などが解説され、「土佐こと

ば」では、土佐人の会話の特徴、土佐ことばの語源、表現の豊かさやユーモア、などについて述べられている。収集が著者の生活空間に限られているため、内容に偏りがあり、必ずしも「土佐ことば」全般が網羅されていない。道具や生物名などについても触れてほしかった。

用例は主に著者の経験をもとにしていて、読み易く、親しみ易い。自然科学者らしく、語源等に関しては文献を参照しつつ、時に独自の見解を述べていて説得力を持っている。土佐を知らない県外人にもなる。土佐ことばに関する優れた教養書として評価された。

松岡周平著
『風聞異説』
(クリケット季刊高知編集部刊)

著者は高知県出身のジャーナリスト。海外勤務などを経て帰郷。



『坂本龍馬』の誕生 船中八策と坂崎紫瀾

出版系企画会社「ノブレスオペリージュ」を設立し、その代表取締役を務めている。

本書は、主として「季刊高知」に連載したエッセイで構成されている。各回のエッセイで主に一人の土佐人をとりあげているが、全体が一つのモチーフで貫かれている。それは、社名にもなっているノブレス・オペリージュ(もともとの意味は「高貴な身分に伴う義務」で、転じて「高貴な精神性」を意味する)である。



『土佐ことば』



『土佐ことば辞典』

の長老に薬草等の治療術の知識を特許にすることを提案したところ、「私たちの知恵が人類の為に使われることは嬉しいが、その喜びをお金に変えるというようなさもしいことはしたくない」と答えたという話である。

約四十名の人物を、世俗的に著名であるとか、何をしたか、ではなく、「いかに生きたか、凛とした生を送ったか」という「生きざま」を中心に紹介している。著者は、最近わが国で見られる「物事を、目先の損得や経済的価値だけで評価する卑しさ」を強く批判し、かつての日本では、貧しく、慎ましい社会の中で、人々は「凛として」生きていた、と考える。そして、人々に「凛として」生きてほしい、と呼び掛ける。

背後にある学識から醸し出された、よく練れて、歯切れよい文章により、読者は容易に著者による



『風聞異説』

現代日本社会への警告を読み取ることが出来る。かびの生えた「道徳心」とは全く異質な、「人間の生き方」を具体的に指し示す有意義な著作である。引用文献と索引があれば、さらに読み易かったと思う。

以上の受賞作と並んで、最後まで候補作とされたのが、中川美佐著『奥村多喜衛』(大空社刊)である。土佐に生まれ、ハワイでキリスト教伝道者となり、日系移民の援助や日米理解に多大な貢献をした奥村多喜衛の伝記である。スケールの大きい奥村の軌跡を、地道で行き届いた研究で詳細に発掘紹介した貴重な報告で、高く評価された。

なかうち みつあき

一九三〇年 静岡県掛川生まれ (本籍高知市)

高知大学教授、学長(二期)を経て現在、名誉教授。第二十四回高知出版学術賞審査委員長。専門は発生生物学。著書に『ホヤの生物学』(東大出版会)、『DNAがわかる本』(岩波書店)など。

グッゲンハイム具体展の招待日

2013年2月、グッゲンハイム美術館の展覧会「具体—すばらしい遊び場」出品者の一人として、ニューヨークへ行って参りました。グッゲンハイム美術館は、ソロモン・R・グッゲンハイム財団が設置、運営している美術館で、ヨーロッパをはじめ世界各地にも幾つかありますが、特にニューヨークのグッゲンハイムは、同じくニューヨークのモダンアートミュージアム（通称 MOMA）と共に現代美術のメッカとして知られています。

この美術館はフランク・ロイド・ライトのいわゆる有機的建築を代表するもので、美術館としては異色のデザインで知られています。タクシーでセントラルパークの東側をちょっと北に走ったところにその建物はありました。外観は、まいまい貝のようなふくらみをもった白で、美の殿堂として周りの建物とは一線を画しています。

憧れのグッゲンハイムに着きました。建物の内部は、ステインドグラス風の枠組みで支えられた透明ガラスの天井まで、巨大な円筒形の空洞になっています。空洞の側面は傾斜したスロープになっており、鑑賞者はこのスロープを登りながら壁の絵を見る仕組みになっているのですが、この日はその常道が通用しませんでした。元永定正の「水」が鑑賞者の足をくき付けにしてしまったからです。

「水」は、色をつけた水を透明なヴィニールパイプに入れて、両端を引き上げるといったコンセプトで生み出された作品です。元永はこの「実験」を1954年から繰り返し行っていました。1993年にヴェニスで制作した「水」が高い評価を受けました。そのことが今回の出品依頼につながったのですが、ニューヨーク留学の経験もある元永が、病床でオファーを受けたとき考えたのは、如何にしてグッゲンハイム美術館の大空間に最大級の「水」をからませるか、ということであったと思われまふ。

ヴィニールパイプは直径1メートル、長さはドームの直径、それが10本。フォルクスワーゲンを裏返したような水の塊がどれだけ重いか知りませんが、とにかく、パイプを縛ったワイヤーを、コンクリートの壁を壊して鉄骨に直結する大工事が行われていました。

日本ではあり得ないことです。キュレイター、ミン・ティアンホ

んの権限の強さでしょうか。ミンさんは、元永の「水」を最大の目玉とするため、病室に通い詰め、打ち合わせをしたそうです。残念ながら元永自身はグッゲンハイムの「水」を見ることはありませんでしたが、他のスロープに飾られた作品たちは、元永の新作（？）の出現によって、かなりの打撃を受けたと思います。

いみじくも、グッゲンハイム会員募集のチラシに2つの写真が載っていました。1つは殖民時代の必需品を思わせる、馬、荷車、家財道具、家など、ドーム中央の空間に、まるで宇宙空間にただよう廃棄物のように吊り下げたものですが、この場合スロープの展示はありません。

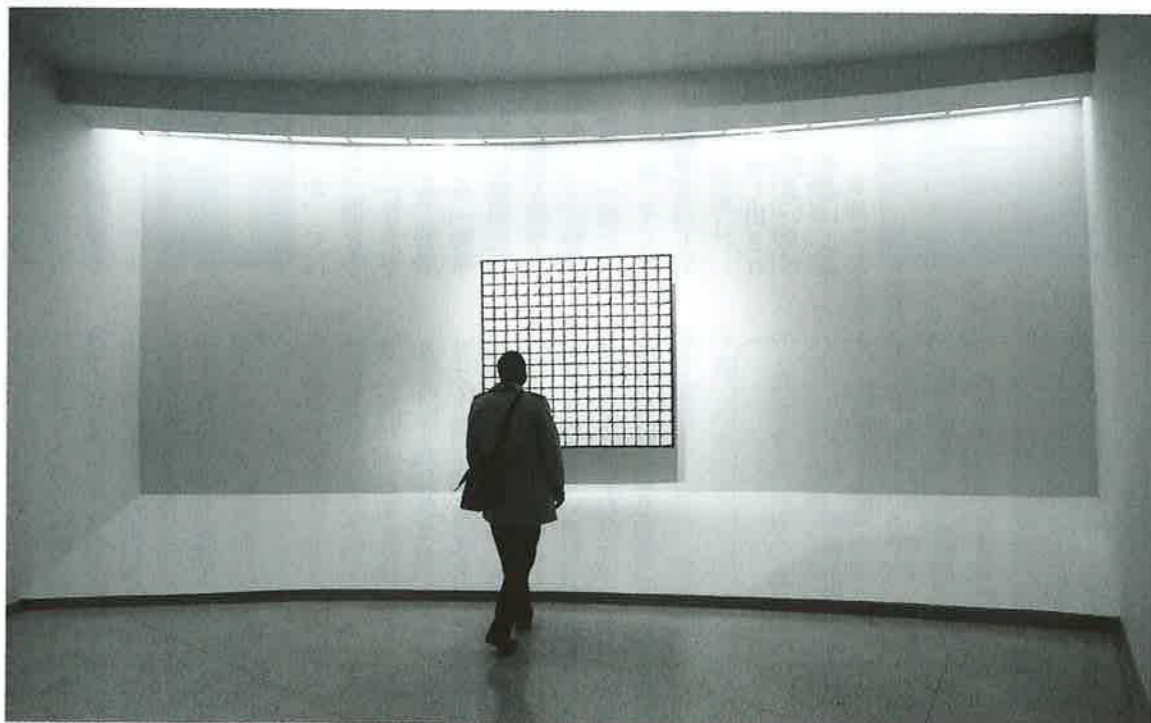
もう1つはケリーの色彩やかな幾何学的な抽象画の、スロープの壁面のみでの展示で、下から見上げるとぐるり、教会のステインドグラスのように美しいが、個々の作品はあまり大きくなく、中央の空間には何もありません。

グッゲンハイムでの具体展では、これら2つの使い方が競合した感がありました。作品が大きいため、ライト方式（傾いているものが垂直に見える）がはたらきません。傾きが逆にどんどん大きくなり、やがてすべり落ちて大切な展示作品を壊すのではないかと恐怖を感じました。

やっと見つけた私の作品は、スロープの終点の6階にありました。蒜盤目の私の「装置」があつたスロープの混乱の中にあつたら、私の芸術が壊れてしまうのではないかと心配していましたが、この部屋の床は完全な水平面、静かで、広々として、奥まって、グッゲンハイムの床の間ではないかと思いました。

以上で91歳になったへんくつ翁さんが、50年前の自分に会いに行った報告です。ここまで導いてくださった皆さまに、ありがとう、を申し上げます。

作品は宮城県立美術館に帰り、収蔵庫に眠っています。またの機会があつたら見て下さい。



高崎元尚 記

1923年 高知県生まれ
現代美術家、具体作品作家。1949年東京美術学校彫刻科を卒業。1954年モダンアート協会展新人賞を受賞、1966年具体美術協会に参加。1996年高知文化賞を受賞。



写真 高崎元宏

エネルギー選択への道々 小水力発電の可能性

藤島 和典

二〇一一年三月十一日に起こった東日本大震災とそれに続いて起こった福島第一原子力発電所の爆発事故。あれから早三年が過ぎました。福島県では、未だ八万一千人が避難生活を強いられ、帰還への具体的な道筋が見えない状況が継続しています。このことは、果たして福島県だけの問題なのでしょうか。原子力を含めた日本のエネルギーについて、国民一人ひとりが、深い問いかけを突きつけられたままではないでしょうか。

誰もが、東北の惨状や原子力発電を取り巻く不安さについて考えを巡らしていたころ、私は、過疎に悩む地域の活性化のためと活動し始めたばかりのNPO法人土佐山アカデミーで働いていて、日々、活性化につながる地域の資源が何かないかなあと、高知市北部に位置する中山間地域・土佐山高川集落のユズ畑に居ました。ある時、地元の大工さんがつぶやきました。「目の前を流れているこの川の水

※「平成二十五年十月 内閣府原子力被災者生活支援チーム 避難指示区域の見直しについて」より

で発電したエネルギーを地域で使えたらいいなあ。」

かつては土佐木炭の生産で栄えた土佐山です。現在でも薪風呂や竈（かまど）が現役で使われていて、食べ物だけでなく、エネルギーの地産地消も当たり前に日々営まれています。どこか遠くの大規模発電所で必要以上につくられ送られてくる得体の知れないエネルギーではなく、地域資源であり、再生可能な自然資源でもある「水」に着目するのは必然です。この一言がキッカケとなって、本格的に小水力というテーマで思考を巡らせることになり、大きな企業ばかりに頼るのではなく、地域が必要に応じて活用できる、「市民がつくる小水力発電」への道が動き始めました。

二〇一一年九月のある日、その年の六月に産声を上げたばかりの高知小水力利用推進協議会の講演会に参加しました。小水力と名のつく集まりに初めての参加でした

が、広い会場には参加者が溢れていて、これから何かが生まれるような高揚した雰囲気も感じました。高知県内では先駆的な取り組みである三原村の事例発表では、地域のNPO法人いきいきみはら会（代表者増井三郎氏）による下ノ加江川芳井堰の発電計画が紹介され、地域住民が毎日欠かさず水位を計測しているという地道な活動を知ることが出来ました。こうした先行事例に後を押しされるように小水力発電にのめりこみ、土佐山、仁淀川町、馬路村など現地調査にまで出掛けるようになっていきました。

この二年ほどは、小水力と名のつく色々な場所に出掛けて、本当に多様な多彩な人たちとの交流がすすんでいます。全国小水力サミット（岐阜県）、全国小水力発電実務者研修（大阪）など。再生可能な自然エネルギーの中でも、特に小水力分野は地域密着型であり、地域をなんとかしようという人の集まりである場合が多く、非常に熱い、いや暑苦しいほどの熱気に包まれることも



高知小水力利用推進協議会会長とメンバーによる「自転車のハブダイナモを再利用した水車」でのLED点灯実験

もいいのです。全国では砂防ダムや農業用水路を活用した事例が多くありますが、全国有数の日射量や降水量を誇り、急傾斜の山間地が多い高知県では、溪流を利用した流れ込み式水力発電の可能性が高いと思われます。

私たちが開発可能性調査（FIS）の対象とする小水力発電は、出力規模によって、〇〜五〇kW未満、五〇kW〜二〇〇kW未満、二〇〇kW〜一〇〇〇kW未満の三つの範囲です。ここでさらに重要な観点を加味します。それは、持続可能性であり、同じく経済性です。かつては川の水をすべて使う全量取水が普通だったようですが、年間を



土佐山高川区検討委員会による住友共同電力別子山発電所の視察

通じた流量調査に基づいて、水生生物に配慮した維持流量を確保したり、魚道を整備したり、低環境負荷の技術を導入するなど、自然共生型の土木構造物による検討を進めています。また、地域が幸せになれる小水力発電実現に理解を示してくれる企業との測量や設計、土木工事などの具体的なコスト削減についても検討が進んでいます。一昨年七月、FIT（固定価格買取制度）という再生可能エネルギーの開発・利用を促進させる新制度が施行されました。つまり、発電した電気を電力会社に売る「売電」を活用し、地域内で資源と経済が循環するモデルを創ろうというわけです。未利用資源であり、地域に豊富に存在する自然エネルギーは、地域活性に貢献する大きな潜在エネルギーを秘めているのです。

私たちは朝起きた瞬間から、選択の連続です。歯磨き粉や歯ブラシ、石けんなどは、数ある商品の中から自ら選択し、お金を支払っています。蛇口をひねれば出てくる水でさえ、国内外のミネラルウォーターの中から選んで買うことができます。今や暮らしに欠かすことが出来ない携帯電話・スマートフォンも、機種や色だけでな

く、通信事業者や通信プランを選択して利用しています（あまりにも多すぎて選べないこともありますね）。また、食品の安全がしばしば問題になります。食品には、生産地や生産者、使用材料、生産方法が表示され、情報が見えることが消費者の安心につながっています。ぜひ、電気についても、なにから生み出された電気なのかという「見える化」が進み、使用量や使用目的に応じて選択し、使い分けられるようになりたいものです。

今現在私が働いている認定NPO法人NPO高知市民会議が掲げるキャッチフレーズは「社会を変える市民のチカラ」です。多くの市民の参画により、様々な社会的課題を解決していこうと活動しています。ただし、大上段に振りかぶって、市民のチカラだけで社会を変えていこうというのではなく、場合によっては行政に変えてもらうこともあるでしょうし、企業の協力を得て達成することもありません。また、既存の社会システムや枠組みの中で変化することもあれば、枠組みを組み替えたり、繋げたり、無くしたりすることも時には求められてきます。私たち市民のチカラと行政、企業が協

しばしば。こういう類の集まりではよく「この熱気を電気エネルギーに変えよう」と言われますが、なかなか実現には至っていません。さて、肝心の小水力発電について。大前提として小水力発電に必要なこと。まずは、地域住民が主体であることです。地域の大切な資源である水を使い、地域住民が主体的に関わり、生み出される利益も地域に還元する。小水力発電で出た利益を森林整備に巡回させることで、保水力を涵養したり、薪や炭の生産を加速化することが可能となります。

次に、「水量」×「落差」です。水が流れていて、かつ落差があることです。生み出されるエネルギーはかけ算で計算されますので、水量が少ない場合は落差があること、水量があれば落差は少なくても

力・協働することで、より多くの課題解決方法が見えてくるのではと考えています。協働とは、パートナーシップとも、コラボレーションとも言われます。協働という文字には「力」が四つもあり、力を合わせることを意味します。また、「協」は「かなう・かのう」とも読みますので、色んな人たちが力を合わせることで、願いがかなったり、不可能が可能になるという意味も含まれています。次世代に負の遺産とならない再生・持続可能なエネルギーの安心・安全を求めて、これからも活動していきます！

ふじしま かずのり

一九六四年 高知真本山町生まれ
高知大学人文学部フランス文学科修了。認定特定非営利活動法人NPO高知市民会議事務局長。こうち生協／主夫／NPO法人土佐山アカデミーを経て現職。高知小水力利用推進協議会運営委員。

「波の下都」のなぞ

「平家物語」に「先帝身投げ」という段がある。古典の教科書によく載せられる教材である。この中に「波の下にも都の候ふぞ」という有名な言葉が出てくる。「波の下にも都はありますよ」という意味だ。

壇ノ浦の戦いで、平家が滅びるまさにそのとき、入水を覚悟した二位殿(平清盛の妻、平時子)が主上(安徳天皇)に向かって発する言葉である。この言葉とともに安徳天皇は海に沈む。このとき安徳天皇は数え年八歳。日本史上、戦の中で命を落とした唯一の天皇だと言われている。「波の下にも…」は、一度聞くと忘れられない哀切な響きを持った言葉だ。けれどこの哀切さが何に起因するかというところは意外に意識されていない。私自身授業をしてはじめて気がついた点である。今回はその授業を紹介したい。

教科書では省かれているが、この場面の後に「雲上の龍くだったって海底の魚となり給ふ…」という表現が出てくる。

極度に緊張していたんだろうね。主上は八歳の子供だけれど、二位殿に言われて、伊勢神宮にお別れ申し上げ、西方浄土に向かって念仏を唱えられたわけだから、ああ、死ぬのだな、と子供なりにわかったのかもしれない。とするとどうして二位殿が「間髪を入れず」入水したのかもわかるね。

P 「それ以上主上をこわがらせないため」
P 「主上をそれ以上動揺させないめ」
T 「そうだね。もう一つ。意味深長な言葉がある。『波の下にも…と慰め奉って』のところ。なぜ、二位殿は入水の直前に主上を『慰め奉った』のだろうか？」
P 「…不安そうだったから」
P 「こわがっていたから」
T 「そう。すくなくとも穏やかな表情じゃなかったんだろう。だから慰めずにいられなかったんじゃないか『都の候ふぞ』の『ぞ』は、強意の助詞だ。強い調子で慰めてるね。」
さて、「波の下にも都の候ふぞ」という言葉は有名だ。平家物語を知らない人でも、この言葉は知っている。印象的な言葉だからね。
では、どうして二位殿は、「波の下にも都の…」という言い方をしたのだろうか。こういうときに子供を慰

める言葉は、他にもいろいろあるだろう。たとえば、「波の底にはきれいなお魚がいっぱいいますよ」とか、「美味しいお菓子がありますよ」とか、この時代なりの慰め方が様々あったはずだ。…どうして「都」なんだろう。「都」にはどういう意味があるの？」
P 「……(答えられない)」
T 「これは、都じゃないとダメなんです。『波の下にも都の候ふぞ』と言ったから…あるいはそう伝えられたから、八〇〇年の歳月を超えて残った言葉なんだ。他の言葉だったら、たぶんこれほど知られることはなかっただろう。『都』という言葉が人々の心をうったんだ。」
さて、「都」にはどういう意味があるんだろう？」
P 「……(答えられない)」
T 「『波の下にも都の候ふぞ』の『も』がヒントです。これ、どういう意味？『も』の裏の意味を読み取って下さい」
P 「…波の上にも都はある」
T 「そのとおり。波の上にも都はある、でも波の下にも都はありますよという意味だ。では、『波の上にある都』ってどういう都？それはどこにあるの？」
P 「京」
P 「平安京」

器を敵の手に渡すまいと決意する。そして孫である幼帝に泣きながら語りかける。その部分がこの段のクライマックスだ。まず現代語訳で紹介したい。(一部を省略してある)

「君はまだご存じごさいませんか。…君のご運はもう尽きておしまいになりました。まず東にお向かいになって、伊勢大神宮にお別れを申され、その後西方浄土のお迎えにあずかるために、西にお向かいになってお念仏をお唱えなさいませ。この日の本の国は広い世界から見れば粟散(あぶらご)の地といって、粟粒(あぶらご)のようにちっぽけで悲しい所でございますので、極楽浄土という素晴らしいところへわたくしがお連れ申し上げます」と二位殿が申されたので、主上は御涙をばげしく流されながら、小さくかわいらしい御手を合わせ、まず東を伏し拝み、伊勢大神宮にお別れを申され、その後西にお向かいになって、お念仏を唱えられたので、二位殿は間髪を入れず主上を抱き申し上げ、「波の下にも都がありますよ」と慰め申し上げて、深い海の底へお入りになる。

教科書中の「先帝身投げ」はここで終わる。末尾で悲劇的な緊張が急激に高まる。古文テキストでその部

P 「現実の世界」
T 「そう。陸にある現実の都だね。さて、主上って普通はどこにいる人なの？」
P 「都」
T 「どっちの都？波の下都、陸の上の都？」
P 「陸の都」
T 「そうだね。都にいるからこそ主上と言える。都にいてこの国を治めているから主上なんだ。ところが、今はどうなっている？」
P 「都を追われている」
T 「そう。平家は都落ちした。書かれていないけれど、おそらく主上は泣いたのだから、都へ帰りたいと言っている。この時代の都と地方の文化差は大きい。幼帝にはショックがいっぱいあっただろう。特に壇ノ浦の戦いのころは、船の上で生活していたわけだから、衣食住にも不自由を感じることもあったのではないだろうか。これも書かれていないけれど、主上が泣くたびに、女房たちは必死になんて慰めたことだろう。『今しばらくお待ち下さいませ。我等が知盛卿が源氏の兵どもを追い散らし、必ず主上を都へ迎え参らせることでありませう。もうしばらく、どうぞ辛抱下さいませ』

分を再度お読みいただきたい。(できれば声に出して)
(主上は) 御涙におぼれ、小さくうつくしき御手を合はせ、まづ東を伏し拝み、伊勢大神宮に御暇申させ給ひ、その後西に向かはせ給ひて、御念仏ありしかば、二位殿やがて抱き奉り、「波の下にも都の候ふぞ」と慰め奉って、千尋の底へぞ入り給ふ。
以下、授業である。
T 「二位殿やがて」とあるけど、「やがて」って、どういう意味？現代語の「やがて」とは意味が違うよ」
P 「そのまま」
P 「すぐに」
T 「そうだね。『やがて』には『即座に』という意味がある。この場合は『間髪を入れず』ということだろう。どうして、二位殿は『間髪を入れずに』入水したの？」
P 「敵が迫っていたから」
T 「それもあつたらう。だけど、もっと直接的な理由がある。主上(安徳天皇)はどんなようすだったの。本文にはどう書いてある？」
P 「…『御涙におぼれ』」
T 「そう。泣いていたんだね。どうして泣いていたの？」
P 「死ぬことがわかった…のかな」
T 「周囲のただならぬ気配を感じて

P 「現実の世界」
T 「そう。陸にある現実の都だね。さて、主上って普通はどこにいる人なの？」
P 「都」
T 「どっちの都？波の下都、陸の上の都？」
P 「陸の都」
T 「そうだね。都にいるからこそ主上と言える。都にいてこの国を治めているから主上なんだ。ところが、今はどうなっている？」
P 「都を追われている」
T 「そう。平家は都落ちした。書かれていないけれど、おそらく主上は泣いたのだから、都へ帰りたいと言っている。この時代の都と地方の文化差は大きい。幼帝にはショックがいっぱいあっただろう。特に壇ノ浦の戦いのころは、船の上で生活していたわけだから、衣食住にも不自由を感じることもあったのではないだろうか。これも書かれていないけれど、主上が泣くたびに、女房たちは必死になんて慰めたことだろう。『今しばらくお待ち下さいませ。我等が知盛卿が源氏の兵どもを追い散らし、必ず主上を都へ迎え参らせることでありませう。もうしばらく、どうぞ辛抱下さいませ』

都への帰還は、平家の悲願だった。けれど、とうとう陸の都へは帰れな

ひろい まもる
一九五四年 高知市生まれ
早稲田大学第一文学部日本文学
科卒業後、私立土佐中高等学校
に勤務。国語の教師。

「波の下にも都の候ふぞ」という言葉の裏に、都への想いや追放された苦しみ、悲しみがあるとわかって胸をうたれた。安徳天皇が生きていれ

「平家物語」の哀切さは、現代の高校生にも伝わるようである。



World Music Night vol.16
～世界の音楽と料理を楽しむタベ～

世界の音楽と食べ物一度に楽しめる人気プログラムの第16弾！
今回はアルゼンチンの女性シンガー、フロレンシア・ルイスを日本の敏腕ミュージシャンで結成された「ロス・オンゴス・オリエンタレス」が迎える強力ユニットをメインアクトに、地元高知からは高知が誇る歌姫KEN☆KENによるユニット「ロザップ」、そしておなじみお祭りパーカッショングループ「木曜楽団」が参戦！
会場ロビーにはおなじみの世界の料理ブースが多数出店します。
美味しい料理とワイン片手に、南米の情熱的な音楽に酔いしれませんか？

日時：2014年6月4日(水)18:00開場 19:00開演
会場：高知市文化プラザかるぽーと小ホール
料金：全席自由 前売り2,500円 当日3,000円 (ドリンク・フード別)
お問い合わせ：高知市文化振興事業団 088-883-5071



**CONCORD JAZZ FESTIVAL
IN JAPAN 2014**

日本が誇るジャズの祭典をかるぽーとにて開催。国際的なアーティスト達の、スイング、ビ・バップ、そしてジャズ・コーラス！多彩なセッションも堪能できる、魅惑のジャズコンサートへようこそ！

【出演】
Benny Green(pf)
BREEZE (ジャズボーカルアンサンブル)
BIG 3 SAX
五十嵐明要(as)/杉原 淳(ts)/原田忠幸(bs)
岩見淳三(g)/森田 潔(p)/
谷口雅彦(b)/木村由紀夫(ds)

■日時
5月27日(火) 18:00開場 19:00開演

■会場
高知市文化プラザかるぽーと大ホール

■料金
全席自由
一般 前売り4,000円 当日4,500円
高校生以下 前売り2,000円 当日2,500円
※未就学児童の入場はご遠慮ください。

■お問い合わせ
高知市文化振興事業団 088-883-5071



高知を撮る

砂浜バージョンロード 横山 正富

第30回写真コンテスト入賞作品

(平成25年5月 黒潮町入野松原)

Tシャツアート展にあわせ結婚式を募集
こちらの二組が選ばれ今日、式を挙げる事が出来ました(二人は県外の方で既婚者ですが式を挙げておらず、こちらで挙げる事が出来て大変喜んでおりました)

風伯

砂浜を素足で歩く

二月の暖かい日の朝、手結の浜に降りて、裸足で砂浜を歩いた。その時の気持ちのいい感触が忘れられず、三月に入ってから、毎週のようにもともとも近い長浜の海岸を素足で歩いている。
こつこつと波の音を聞きながら歩いていくと、地球の鼓動や自然のパワーを身体で直に感じることができる。高知に住んでいると、こんな場所に来るのにも三分足らずで来ることが出来る。都会に住んでいるとこつこつはいかない。湘南の海に遊びに行くにしても、休日は五時間ものラッシュにうんざりしなければならぬし、行けば人の波や汚い海を見に行くようなものでうんざりする。
長浜の海岸には、休日でも遠くに人影

がちらほら見えるくらいで、浜にはほとんど人がいない。素足で歩いた日は一日中身体がポカポカと暖かい。足裏のツボが刺激されて、血の巡りが良くなっているのだろうか。こんな気持ちのいい感触をみんなはどうしてやらないのだろうか。そう思う自分も最近まで浜を素足でただ歩くことはしなかったのだが。
海にも川にも山にもすぐ行けて楽しめるものは美味しい。こんなすばらしい土地に住んでいるのだから、もっと自然を満喫しなければ損だなあとつくづく思う。やれ観光だ、坂本龍馬だ、よきことだ、と旗を振る人たちの尻目に、もっとそこに住んでいる自分たちの生活を楽しまない。
もう売り込むのは限られ手垢が付きすぎている観光などより、豊かな自然を満喫しながら、静かにそして豊かに生きていくことの方が、ずっと大切なはずなのに、政治は経済的な効果ばかりに目を向けるのはなぜなんだろう。

(緑)

今号の表紙

「△」

門脇千夏

シンプルかつ色鮮やかなイメージの表紙のデザインにしたいと思ったので、絵の具で作ったデクスチャを加工したものを三角の形に切りぬきました。

(かどわき ちなつ/
国際デザイン・ビューティカレッジ2年生)

土佐弁は生き残れるのか

風俗歳時記



全国ネットのバラエティ番組で土佐弁が紹介されていた。動物園に「いんげん」「いんげん」「いんげん」とは、「いんげん」を「極道」と当て字したシーンで私は一人で笑い転げていたら、隣の息子はボカンの。「いんげん」って、怖いという意味じゃないが？「確かに、極道ならその筋の反社会勢力だが、中年以上の高知人なら本当の意味をおそらく誰も知っている。四半世紀前頃から県内各地を取材する中で感じていたのは、子ども世代がアクセントも言葉づかひも標準語化してきているといこと。それは、高知市内だけに留まらない。テレビの影響や親世代が「土佐弁」を使わなくなってきたことだからだろうが、かく言う私も、土佐弁と標準語を使い分け、子どもが小さい頃はできるだけアクセントを中心に標準語化してきた。しかし最近、ふと不安になる。「土佐弁は生き残れるのか」

方言は、歴史と風土とともに培われ、変化し、その土地ならではの「○○せよ」というコマースナルまで、最近はやたら目につくご時世。土佐弁もどきの乱用は避けたいものだ。
バイリンガル：何も、日本語と英語だけではない。標準語と土佐弁、こんなバイリンガル少年・少女がいても面白いと思いませんか？

(立花香)

はの言い回しや表現が確立している。民俗学者・柳田國男は『蝸牛考』の中で、言葉は近畿から地方へ何重もの円を描くように伝播していったという「方言圏論」の仮説を打ち立てた。東西に長い高知県は、高知市内と両端では同心円上にないため、イントネーションも語尾も言葉も違っている場合が多い。その一方で、土佐弁は一括りにされて語尾に特徴のある言語とされることもある。男言葉、女言葉は語尾が特徴的。映画やドラマの影響から、土佐弁を話すには「語尾に『せよ』さえ付けば……』と言った先入観があって、女性「○○せよ」というコマースナルまで、最近はやたら目につくご時世。土佐弁もどきの乱用は避けたいものだ。
バイリンガル：何も、日本語と英語だけではない。標準語と土佐弁、こんなバイリンガル少年・少女がいても面白いと思いませんか？

文化高知 No.179 「隔月発行」
2014年(平成26年)5月1日発行

- ◆ 絵画 (洋画)
- ◆ 日本画
- ◆ 書道
- ◆ 先端美術 (立体)
- ◆ 彫刻
- ◆ 陶芸
- ◆ 工芸
- ◆ 写真
- ◆ ペン字
- ◆ デザイン

第66回

北見市
美術交流作品

市展

アンデパンダン

2014年
5月24日(土) - 6月8日(日)

午前9時～午後6時

●月曜日 休館 (初日は午前10時開場、最終日は午後5時終了)

【会 場】 高知市文化プラザ かるぽーと
7階 市民ギャラリー

【入場料】 前売 300円 当日 400円

振替手帳・療育手帳・精神障害者保健福祉手帳・身体障害者手帳所持者及び高校生以下は無料

【お問い合わせ】 高知市文化振興事業団 088-883-5071

【出品】 搬入日時：2014年 5月18日(日)・19日(月) 午前9時～午後5時
搬入場所：高知市文化プラザかるぽーと7階市民ギャラリー
出品料(1部門)：一般1,500円 学生1,000円

■主催 高知市議代表委員会、公益財団法人高知市文化振興事業団、高知市教育委員会
■共催 高知新聞社、NHK高知放送局、RKC高知放送局、KUTVテレビ高知、KBSさんさんテレビ



かるぽーと
デザイン：坂本 晶子

公益財団法人 高知市文化振興事業団

〒780-0808 高知市九反田2番1号
TEL:088(8)883-5071 郵便振替01600015114869